



凡 事 徹 底

当たり前のことを当たり前

蕨市立第二中学校
学校だより
令和8年度
第4号(7月号)

実りの季節、と言うにはちょっと早いけれど…

校長 齋藤 大輔

□学校総合体育大会二市予選会

いわゆる二市大会が、先日終わった。中体連主催の、全国大会まで繋がる年に一度の大会。諸般の事情により、いくつかの種目は今年度で全国大会が行われるのは最後になる。大人の世界では部活動の今後の行く先は未だ不透明な部分が多いが、現場の子供たちは今をしっかりと生きている。ボールを必死に追いかける姿、眼光鋭く相手を見据える姿、ガッツポーズで飛び上がる姿。そして、大粒の涙をこぼして悔しがる姿。どの会場にも可能な限り足を運んでそれを見てきたが、子供たちのこういう姿、学校の教育現場から失いたくないものだ、と言ったらこれからは個人的な思いと片付けられてしまうのかもしれない。

いずれの会場にも、たくさんの保護者の方が応援に駆けつけてくださっていた。本当にありがたいことである。これから上位大会に臨む生徒たちには、月並みだが悔いのない戦いをしてきてもらいたい。

□それぞれの行事を終えて

「今回の修学旅行、校長先生はみんなに点数をつけました。何点だと思います？」

修学旅行を終えて最初の登校日の朝。学年の集会にお邪魔させてもらった私は、生徒たちに聞いた。一部の生徒たちから、「70点?」「85点?」そんな点が聞こえる。私は発表した。「なんと…、100点です!」キョトンとする生徒たち。まさかそんな点数が出てくるとは思ってなかったのだろう。

もちろんその点数に根拠はあり、その採点の内訳を子供たちに一部説明した。大きな得点源となったのは、最終日の子供たちの動き。帰りの新幹線の時間が決まっている中で、当初の予定にはなかった、しおりにも記載のない行程を2つも追加して、決まった時間内にしっかり収めて動いて見せたのである。学年全体で動くとき、これは口で言うほど容易なことではない。だいたい、この学年の先生たちは子供思いもいところだ。2日目の班行動でお土産を満足に買えなかった子たちがいるから買わせてあげたい。できたら集合写真をもう一枚、撮ってあげたい。子供たちへの思いが強すぎる。素晴らしい。

子供たちの動きの良さ、先生たちのチームワーク、そしてそれらを繋ぐ信頼関係、すべてが見事に融合した、総じて素晴らしい修学旅行であった。極め付きは、解散時の蕨駅。帰りしな、私に「ありがとうございました。」と一礼して去っていく一人の生徒が。ダメ押しの一言。なんと素晴らしい学年。

修学旅行の話に偏ったが、他の学年の校外学習にしても、今回はどこも班単位での行動が主となった。30ないし36の班があれば、その数だけさまざまな出来事、忘れられないエピソード、先生たちも知り得ないハプニングやちょっとと言えない秘密、そしてカレーライスの味が、きっとあったはず。生徒たちは、自分たちの時間の中で、何を学ぶことができただろう。実り多き活動であったことを願う。

後で聞いた話だが、私が100点をつけて気分よく3年生たちの前から去ったあと、生徒指導担当(夜レク担当?)の先生は200点、修学旅行主担当の先生は400点、学年主任の先生に至っては50,000点あげていたと。…最初の私の100点が霞んでしまうじゃないか。まったく、思いが強すぎる。

□地域を知る その3

学区を廻って残る北町方面、三学院の方へ来て確認したかったこと。それは、道路を挟んだ向かい側、地蔵堂の方。その目に味噌を塗ると目の病が治るという伝承がある、目疾(めやみ)地蔵の目。以前訪れた時もそうだったが、今もやはり味噌はちゃんと塗ってあった。信仰は受け継がれているのだなあ、と実感。

北町5丁目、蕨高校周辺まで回り、錦町へもどってきた。最後はさいたま市や戸田市との市境をなぞる形となった。ここでちょっと発見だったのは、地図上に示された市境の線、それに沿って、実際に通れる道がほぼずっとあるということ。常識なのかな。そして、その道すがらに見つけたのが、境橋。ともう一つ、一六橋。どちらも由来はとても古く、境橋は蕨宿と辻村(蕨市とさいたま市)の境を流れる用水路に架けられた橋であると。ここ、通勤経路なのだが、どうやらいつも知らぬ間にこの2つの橋を渡っていたらしい。

薄々感じ始めていたことだが、この学区は他と比較して史跡・名所が多いようだ。これは、この学区の中心に蕨宿があったからだ。きっとそうに違いない。またもや一人合点し、気が済んで学校へ戻った。蕨宿、どんな宿場町だったのだろう。もっとこの地域の歴史を知ってみたいとなった。 *ひとまずおわり